

利用される愛国心

堀 黎美*・卞 惟行*

AKING ADVANTAGE PATRIOTISM

Reimi Hori · Iko Ben

Abstract

Since the establishment of new China in October.1949.it was a long and suffering progress, over half a century, for the country to become at last a powerful nation. In 2002 it received long-desired admission to WTO. In 2003 it succeeded in the manned space flight, while it was authorized for earnestly- wished 2008 year Olympics to be held in Beijing.

We the Japanese people, hoping for China to be a member of the advanced countries as early as possible, do not therefore grudge due felicitation on Chinese successes. It was our thought that both countries should cooperate in promoting peace and order as well as economic development in the world. However, in recent reality, delicately ill feeling seems to be often found on each side. In particular, on the side of China growth of abnormal anti-Japan sentiment is observed lately.

It is admitted that Japan caused war-time damages to China and the post-war settlement thereof was in a way inapt leaving a trail of adverse feeling to Japan Under the circumstances, we think timely studies should be made now into the reasons why such anti-Japan sentiment is recently growing so high in China.

始めに

1949年10月の新中国成立から、半世紀余の長い苦難の道のりを経て、近年中国はやっと実力をたくわえ、2002年には念願のWTO加盟を果たし、2003年には有人宇宙飛行を成功させ、悲願であった北京オリンピック、2008年開催も決定した。このように中国が着々と世界の先進国入りするのを慶賀し、日本人としてはともに協力しあって世界の平安と安定、経済の発展を目指すべきだとおもうのだが、現実には近年両国民間に、特に中国の日本に対する反感が高まってきている。

過去の戦争で日本が中国に多大な損害を与えたのは事実であるし、戦後処理の不手際が今に至るも尾を引いているのだとしても、なぜ今急に中国側の反日感情が高まっているのか、いくつかの原因を探ってみたい。

* 教養部

(一)

この小論が活字になる頃には、2008年開催のオリンピックに向かって、北京～上海間の新幹線にどこの国の方式が採用されるのか、決定しているのではないかと推測される。

四半世紀前頃から私（達の意、以下同様）は中国の鉄道をよく利用するようになり、あののんびりゆったりした中国の鉄道旅行はとても好きではある一方、日本の新幹線が導入されれば、目的地までの時間をどれだけ短縮できるかの思いも禁じ得ず、中国の人にも話してきた。4、5年前にも北京から上海に向かうコンパートに、たまたま乗り合わせた鉄道部のかなり上層部と思われる二人の幹部にも、そう話したことがあった。その時、そのお偉方達は、「確かに日本の新幹線は素晴らしいと思うが、目下の中国は新幹線の導入よりも先にしなければならないことがある、それは、まだ鉄道の敷かれていない地域に、どんどん鉄道を敷設していくことだ」と情熱をこめて言われ、それも確かにそうだ、中国全土に鉄道網ができれば、どれだけ救われる人がいるかと素人ながら大いに納得したのである。

しかし数年間に事情は激変し、僻地への鉄道がどのくらい距離を伸ばしたかは不明だが、オリンピック開催時及びその前後の人間及び物資の大量輸送、今後の生活水準の向上に伴う輸送量の増大を考えれば、とりあえず北京～上海間、中国最大の動脈の改善は焦眉の急の事業になったのである。そのために一日も早く着工する必要があり、2003年中にはどこの方式を採用するかが決定されるとみて、目下各国が激しい売りこみ競争を続けているらしい。中でも比較的可能性が高いと言われているのが日、仏、独の方式と聞く。2003年9月3日の朝日新聞朝刊にこの三ヶ国の新幹線の比較が掲載されていたので引用する。

	日本	仏	独
テスト時速	443.0キロ	515.3キロ	406.9キロ
営業時速	300キロ	300キロ	300キロ
安全性	1969～死亡ゼロ	01.10脱線事故	98.6脱線車両大破 100人死亡
旅客輸送量	仏、独の5～8倍		
車両編成	16	10	8
運転間隔	4分ごと	10分	10分

平均遅延時間	0.3分世界一		
エネルギー効 率	仏の40~50% 独の50~90%		
ブレーキ	電気ブレーキを多用志保守費を 大幅軽減		
車内		ビデオ、パソコン使用 可、食堂車、有料だが 座席への食事サービス あり	ビデオ、パソコン使用 可、食堂車、有料だが 座席への食事サービス あり

仏、独の事故に関し、仏、独それぞれの友人にたずねてみたが、残念ながら詳細は覚えていないとのことだった。興味深かったのは仏、独の友人とも「え？中国はまだ自力で新幹線を作れないのですか」と疑問を呈したことである。その後ほどなく中国は有人宇宙飛行に成功し、国を挙げて、中国の勝利！と大喜びをしたのであるから、新幹線だってもちろん自力で完成することは出来よう、時間の制限がなければ。

また前記の朝日新聞にも「将来の国産化に備え、各国技術のいいとこどりができるよう車輛、レールなど、日、仏、独と部分契約の可能性もあり（以下略）」と触れられているのだが、新幹線の技術がそのように分割導入できるものなのか、できたとしても安全に対する統合性は大丈夫なのであろうか。

ところで、比較表を見れば、日本の新幹線の優位性は、客観的にかなり高いと思えるのだが、採用される可能性は不明である。最近緊張の度合いを強めている反日感情を、中国政府としても無視できないからである。もし採用されたとしてもその発表の時点での反発がまず予想されるし、それを乗り越えて運行開始となったとしても、人命、人権、職務、就労習慣に対する考え方の差により万一事故が発生した際、2000年の三菱自動車リコール事件、2001年大阪空港で中国人乗客を差別したとされる日航事件などのように、事実関係を冷静に解明する作業をせずに、過剰な感情的反発がまき起こるのは必至である。この点に関して、櫻井よしこはつぎのような見解を述べている、「しかし、中国には、西側では常識となっている商習慣、契約の概念がありませんから、まず、代価をきちんと支払ってくれるのかどうか、はなはだ不安です。

また、最先端技術の塊りのような新幹線は、高い運営能力がなければ、即、事故になりかねない。その場合、原因が中国側にあっても、全責任を日本に押しつけてくるかもしれない。日本の進出企業

が、中国側から言いがかりのようなクレームをつけられ、身ぐるみ剥がれて裸同然で引き揚げざるを得なかった話はいくらでもあります」(文芸春秋2003年12月号P175 新幹線は中国の罨に落ちる 対談陳水扁、櫻井よしこ)

(二)

では、そのような反日感情がどのように醸成されてきたのか原因を探ってみると、もちろん最大の原因は過去の戦争である、戦後産まれの人口の方が多くなってしまった日本では、日本が過去に中国を侵略したことすら知らない青少年が増えた結果、さまざまな論や行動で被害国の神経を逆なでする人(青少年と限らない)がいるが、日本が過去に中国を侵略したのは歴史的事実なのであるから、学校教育の中で、社会や歴史の授業ではもっと時間を割いてしっかり教育するべきであるにもかかわらず、それがされていない。

中国の小中学生の教科書には実にくわしく「×年×月×日、どこそこで、日本軍の△△△が支揮する××部隊が、△△の方法で中国人×名を虐殺した」というような例が数十頁にわたって記載されているのである。くわしく言うと初級中学の歴史教科書6分冊で、中国4千年の歴史を学ぶのだが、その約12分の1のスペースがこの日中間の戦争の記載である。それらのすべてが真実がどうか論証する立場にないが、少なくとも被害者側は絶対に忘れないことは、日本人として銘記しておくべきだ。そのことはまた戦後処理の問題についても言える。日中が中国に賠償金を払わなかった経緯は、1945年当時の中国の為政者蒋介石が共産軍との内戦でアメリカの援助を受けており、敗戦後の日本が共産化するのを危惧したアメリカの要請を拒めず、賠償請求を放棄させられ、その後蒋介石を台湾に追いやり、現在の新中国を発足させた共産党の当時の首相周恩来もそれを引き継がざるを得ず、1972年日中国交回復時、賠償請求を正式に放棄し、国際法上その権利を失ったのだが、いずれにしろ全国人民の合意の上ではなかったという見方もあって、国家としては放棄したが、個人、民事としては請求権がある、という意見が昨今になって出て来ている。

敗戦後数年にわたり困窮を極めた日本は、賠償請求をしなかった中国に深く感謝し、その後中国への最大の援助国になっていったのも、感謝のあらわれの一つなのだが、残念ながら日本の援助は中国人民にはほとんど知らされてはいない。歴史に“もしも”ということはあるべきとしても、今にして思えば、長い時間がかかっても戦後処理をもう少しきちんとしておくべきだった。と思えてならない。

(三)

つぎに反日感情の大きな原因と思えるのは日本の存在自体が中国人のプライドを傷つけていることである。それは古代からの経緯と現代世界の力学両面から考えられる。

長幼の序に厳しい儒教文明圏にある中国や韓国から見れば、日本は蛮夷ではないにしても朝貢を許された臣下か、せいぜい弟分であるはずなのに、師であり親である（べき）中国、兄である（べき）韓国に対しあまりにも不遜である、との思いが底流にあることは疑う余地がない、もちろんあまり知識のない人々の感情であるにしても、そう思っている人の数が多ければ、それはやはり無視できない。現に私も中国で暮らしていると「昔、徐福が連れていった子供達が日本人の祖先だ」とか「日本は昔、中国の属国だったのだ」など、と言われることがあって驚くのである。

そのような歴史観を持ち、どうしても自国の優越性を誇り、日本を自国の下に位置づけたい人々には、現在世界で占めている日本の地位は不当なものに見える。ここ数年日本経済はかなり低調ではあるが、例えば国連の分担金（一位のアメリカが約22%、二位の日本は約20%弱、中国1.5%、ロシア1.2%、仏、英それぞれ6~7%）、開発途上国への援助、世界的にも国内でもあまり評価されていないが、湾岸戦争や今回のイラク復興資金の拠出、（サーズ禍に見舞われた中国に見舞金も送った）などすべて日本人の税金が使われていることや、日本の誇る科学技術の発展は、日本の庶民が何百年も前から地道に教育に投資してきた成果であることなど、他国にはほとんど知られていないから、日本からの侵略戦争で被害を受けなかったら当然中国が占めているはずの地位を、日本が不当に占めている。それは何としてでも取り返し、中国はアジアの盟主、ひいては世界の指導的位置に立たなければ、との思いが強いのである。だから2008年のオリンピック北京開催が決定した際も、たまたま大阪も立候補していたため、“日本に勝った！”というスパイスが利いて、喜びの味を一層甘美なものにしたのである。有人宇宙飛行の成功も中国に負けたという感情ではなく、日本は目指す道が異なるから素直に慶賀していると思うのだが、中国人同士の集まりでは「中国はもうあらゆる面で日本を超えた」と発言する人もいるのである。もし日本が敗戦後立ち上がることができず、世界中に援助を求めているような状態であるとするならば、中国の日本に対する感情は違ったものになっていたであろう。

中国は世界第一の人口を有するし、国土も広く、文明発祥地の一つである。だから世界に冠たる大国でありたい思いが強いのかもしれない。また中国は広く、中国自身が一つの世界であるから、世界の中で右顧左眄している日本と違って他国はどうかあまり気にならない。私自身の体験からそう思う。だから他国には他国の価値観がある、と考えるのはどうも苦手のように見える。それはしばしば他国から中華意識と指摘されるところにも通じているのだが、現代の中国人のプライドは、被害者意識に裏打ちされていることもある。これは日本に対してだけではない。例えば、スポーツは特に国民感情をあらわに示す。一例を挙げると、世界の通念ではサッカーの母国は英国とされている。しかし中国はそれを絶対に認めない。中国においてはサッカーの母国は中国なのである。古代に中国で発祥

した競技なのだそうである。私見では、古代中国で似たような競技が行われたかもしれない。中国以外でも古い歴史を有する国では、人々は自然発生的に球を蹴る遊びは行われたのではなかろうか。英国ではどのように始まったのか分からないが、少なくとも現在行われている型に作り上げ、人々を熱狂させるスポーツに仕立てたのは英国であって、中国ではない。中国は自分の国が大昔に最初に始めたのだから、サッカーの母国は中国だと主張する前に、最初にその競技を始めたのであれば、どうしてそれを現代まで続く形に完成させられなかったのか、その点に思いを致すべきと思うのだが。スポーツの勝敗に関しても中国のジャーナリズムは興味深い反応を示す。外国勢と試合して中国側が破れると、その試合は“中国ははめられた。あるいは、審判が相手側に有利な判定をしたため、中国は負けた。”と報道しプライドを保とうとする。

少し前のことになるが、卓球の小山ちれに関する態度も大人気ない。何智麗は女子シングルの元世界チャンピオンであるが、中国国内の軋轢でソウルオリンピックの代表をはずされてしまう。後に彼女は来日し、日本人と結婚して帰化し小山ちれとなり、広島アジア大会での日本代表選考試合でスマッシュが決まると、日本語で「よしっ！」と叫び、決勝で中国選手を破って優勝した際、インタビューで「日本人として勝てて嬉しい、この優勝は今までのどの優勝よりも嬉しい」と答え、それがテレビや新聞で報道されて中国側の怒りを買った。「過去に我々の同胞を殺してきた日本の側について、祖国に反旗をひるがえすとは何事だ」「誰が今までお前のことを養って一流選手に育て上げたのだ」「上海に戻ってきたら殺してしまえ」等々、現在外国へ渡った元中国代表の卓球選手は数多い。理由はさまざまであろうが、アスリートとしては自由に能力を向上させ、発揮できる環境を求めるのは自然であろう。個人の能力を国家の道具とされたくない人間もいるのだ。しかし小山ちれに関しては、中国代表からはずされたのを恨み、中国に仕返しするため日本に帰化して代表になった、とみなされている。

反日、抗日となると、どうしても理性を失うようである。人気女優の趙薇（ビッキー・チャオ）の事件もある。彼女は多くの映画、テレビに出演し、歌手としてもコンサートを開き、CDも出し中国の若者にとっても人気のあるスターだが、2001年にあるファッション雑誌のモデルとしてアメリカのカメラマンの選んだ服を着て撮影された。後日その雑誌が発売されると、そのワンピースの柄が旧日本海軍旗に似ていたという理由で、命の危険さえ感じられるほどの国を挙げての非難の対象になったのである。

この間の状況を、前人民日報高級評論委員馬立誠が次のように述べている。「有名女優の趙薇が、商業目的で、日本軍旗〔旭日旗〕のデザインに似た服を着たのだ。ややぼけた雑誌転載写真でその服を見たが、脇に「日本軍旗に似た」という注釈が無ければ、服の深遠さに気付く事は無かつただろう。

趙薇はその服を着たことにより、国中の世論にたたかれた。糾弾者たちは、彼女が事情を知っているかどうか、彼女がその服を着て何をしたかは問わず、彼女個人の権利、名誉も顧みず、メディアやインターネット上で、「民俗の裏切り者、売国奴、小日本の芸者」「レイプし先祖の墓を暴け」などと、のろいの言葉を浴びせた。彼女の顔に別人の体で全裸写真を合成し、ネットに垂れ流す輩もいた。ことは、彼女が公開の場で引きずり倒され、汚水を浴びせられる事態にまで発展した。2002年4月3日付けの『北京青年報』紙上によると、呉某は、趙薇が出演する2001年12月28日の長沙でのイベントに、汚水を詰めたミネラルウォーターの瓶を持ち込み、「趙薇の背後から舞台に上がり、彼女を引きずり倒し、汚水をぶちまけた」のだ。

全国的な大批判、呪詛、肖像の不法使用、身体への障害という圧力を受け、趙薇は、全国民に謝罪せざるを得なくなった。以下略」

(馬立誠著、杉山祐之訳<反日からの脱却>P8~9)

冷静に考えれば、彼女は仕事の一つとしてカメラの前に立っただけで、“売国奴”でもなければ、“九死に値する罪を犯した”わけでもない。第一20代半ばの若い娘が、旧日本軍の旭日旗など知る由もなかろう。彼女を非難する方法が、半世紀近い昔の反右派闘争、それに続く文化大革命時代から、少しも変わっていないことに驚かされる。中国社会の恐ろしい所は、ひとたびこのような事能になってしまうと、反論や釈明の機会は一切許されず、他からの弁護もないことだ。

さき頃日本の新聞をも賑わせた、2003年10月29日西安で起きた日本人留学生の事件も、同じ線上にある。日本人学生の無知、低俗、軽率さには赤面させられるが、日本人が事件を直視し、事件から学ばねばならないのは、北京や上海の華やかな反映の陰に、中国の内部にはさまざまな矛盾、不満が渦巻いており、きっかけがあればそれが激しく噴出する危険性があること、一党独裁政権下では、不満があってもそれを直接政府に異議申し立てできないため、反日、抗日行動は格好の代替物として利用されることである。反日、抗日はいくら言い立てても、中国国内では誰からも批判されないどころか英雄視さえされるのである。(女優趙薇に汚水をかけた呉某とやらも、他の資料によると彼が大学に進学できなかったことを知って、彼を大学に入学させようとの動きがあった由)

西安西北大学でも、日本人学生に暴力をふるったのは、学外から乱入した“身元不明者達”であるといわれている。(朝日新聞2003年11月3日朝刊5面、読売新聞11月4日朝刊6面)何か騒ぎがあるとそれに乗じて自分のうっぷん晴らしをする。どこの国にもそのような人間はいるものではあるが。

(四)

毛沢東、華国鋒、鄧小平、いずれの時代も対日感情は現在ほど悪くはなかった。1989年6月の天

安門事件のあと江沢民の時代になり、毛沢東や鄧小平のように建国の功労者でもなく、実力も人気もはるかに及ばない江沢民が、国民の要求、不満、不公平感などを、共産党批判に向けさせることなく国の舵取りをしていかねばならなくなった時、彼個人の日本嫌いと相まって、歴史問題という形で中国人の愛国心を刺激し、国をまとめようとしたのが今日の状況を招来したもう一つの原因である。

しかし、“院政”などと言われているが、江沢民の時代は去った。新しくリーダーとなった胡錦濤がどのような舵を取るのか、今はまだ鮮明ではないにしろ、中国国内でも、日中間の国民感情の乖離を改善しようという動きが出てきている。中国で発表された論文について触れるならば、前出の馬立誠「対日関係の新思考」(2002年12月発行「戦略と管理」第六号誌)、中国人民大学時殷弘教授の「中日接近と『外交革命』」(2003年4月「戦略と管理」第八号誌)、元社会科学院日本研究所副所長馮昭奎「対日関係新思考を論じる」(2003年8月「戦略と管理」第十号誌)(以上の諸論文はそれぞれ「文芸春秋」、「中央公論」、読売新聞などに全訳、抄訳で紹介されている)など、これまでになかった日中関係の再構築を目指す論文として注目される。

また、さきの西安西北大学の事件でも、大学側は事をなるべく穏便に処理しようとして(それが逆に騒ぎを大きくする原因にもなったのだが)行動したようだし、中央政府も拡大方針を取らず、早く収束することを望んだという。このような抗議行動というか騒ぎは中国にとっても危険な要素をはらんでいるのである。

おわりに

以上述べてきたように、愛国心は誰にでも理解できる感情であるし、持っていきかたによっては冷静な思考を停止させ、感情的になりやすい“両刃の剣”である。日本の26倍の国土と10倍以上の人口を有し、56の民族が存在する中国は、愛国心を利用して国をまとめてきた一時期から少しずつ方向転換を目指しつつあるのかもしれない。人間が生存する為には基本的に欠かせない空気、水、食料、エネルギー等々、すべてに問題を抱える中国であるが、人々の生活水準は確実に年を追って向上しているし、もう過去の貧困な時代に後戻りするのを人々が望まない以上、近隣諸国と友好関係を保ち、特に最大のビジネスパートナーである日本とは協力関係を密接にしていくことが、中国の(もちろん日本にとって)国益に適うことでもある。今後どのようにして負の遺産を減らし、協力し合っていけるか日中両国にとって最大の課題であろう。

参考文献

『日中再考』古森義久著 産経新聞社 2001,6,30 発行

利用される愛国心

『<反日>からの脱却』馬立誠著、杉山祐之訳 中央公論社 2003,10,10 発行

『中国人とどう付き合うか』天児慧著 NHK Books 2003,10,30 発行

『なぜ中国人は日本人を憎むのか』石平著 PHP 研究所 2002,1,30 発行

『中国「愛国攘夷」の病理』石平著 小学館文庫 2002,6,1 発行

『日本人はなぜ中国人に嫌われるのか』高橋桂蔵著 ごま書房 1998,9,20 発行

『中国 ODA 6 兆円の闇』青木直人著 祥伝社 2003,9,10 発行

『雑誌 中央公論 12 月号』 中央公論社 2003,12,1 発行

『雑誌 文芸春秋 12 月号』 文芸春秋社 2003,12,1 発行

新聞 香港明報、中央社两岸新聞（台湾）、澳門時事討論区（マカオ）

鳳凰網（インターネット）

（平成15年12月10日受理）